

今川の里を歩く 続編
観泉寺と今川一族の歴史をのぞく

秋晴れが続くことが多い11月上旬だが、この日は何とも冴えない曇り空で寒々しい一日だった。船橋での用事が済んだらまだ13時を過ぎたばかりだったので、もう一つ仕事をしようと思い立ち、総武線各駅停車の中野行に飛び乗った。

昼食後の心地よい微睡も手伝って、中野まではさしたる時間も感じずに行ってしまった。中野で乗り換えて荻窪へ。荻窪駅を北口に出ると青梅街道に面した所に「荻14」のバス乗り場がある。

青梅街道を西へ走るバスは、荻窪警察署前の交差点を右折して北に向かい桃井の住宅地に入る。荻窪病院でバスを降りて、中央大学杉並高校を右手に見て北に向かうと、正面に立派な塀に囲まれた観泉寺が待ち構えている。大きな石塔に深く彫り込まれた寺名が力強かった。

彫り込まれた文字は「曹洞禅宗 寶珠山観泉寺」。威厳のある門の構えに吸い込まれるように中へ。

大きな山門を潜り抜けると広い庭、右手に竹林があり、その先には鐘楼がある。左手には庭園が広がり山水が配置されているが、大きな池がコンクリート張りなのが残念。

正面の本堂は「威風堂々」という声が聞こえてきそうな迫力を感じる。

本堂の西から北側に墓地がある。整然と区画されていて歩きやすいし見やすいので、散策してみた。

左手にやや朽ちた石柱に囲まれた四角い空間が現れた。入口に立つ看板には、

「東京都指定旧跡 今川氏累代墓」として、一文がしたためられていた。

戦国時代、桶狭間の戦いで、織田信長に敗れた今川義元の子孫は、江戸時代には高家として幕府に仕えました。今川家は知行所として、上、下井草、鷺宮、中村などを給され、幕府の儀式典礼を司り、将軍の名代として京都への使者や、日光、伊勢などの代参を勤めました。

義元から三代目となる直房はこの観泉寺を今川家の菩提所として、今川氏の始祖国氏や義元など今川一族の供養を行うようになりました。墓碑が残るのは義元の子氏真以降の当主や一族出身の女性や子供など多岐にわたっています。

また観泉寺は今川氏の所領支配の中心でもあり、年貢の徴収や裁判の拠点となっていました。この周辺の今川という地名も今川家と観泉寺とのかかわりに因むものです。

石柱に囲まれた区画の中に入り、ひとつひとつの墓石に刻まれた文字を読み取ってみたが、風化が進んでおり、「今川・・・」「・・・氏・・・」など全文字を読み取ることが困難なものが多かった。

今川家累代の墓を出てさらに奥へ進んでみると、墓地の中央部に歴代の住職の墓所があり、高僧の墓所らしい威厳に包まれていた。

建ち並ぶ墓石を見ると、古いものから新しいものまで含めて、同じ姓の墓石が数多くみられるので、地元の有力者のものと思われる。他人の墓石を丹念にのぞき歩いてきたが180m×130m位の広い墓地はあてもなく歩きまわるとかなりの労働になった。

墓地散策を終えて、正面の庭園に出てきたら、5,6人の老人のグループが足元のイチヨウの葉を拾って胸に飾って楽しんでいた。

●今川一族の系譜

清和源氏の流れから生まれた足利家(始祖は足利吉康)。その足利家三代当主(義氏)の長子は側

室の子だったので、足利家本流は正妻の子である泰氏が承継した。

足利義氏の側室の子である長氏は、三河の吉良荘を与えられ「吉良」を名乗った。(吉良家の始祖) 吉良長氏の子である吉良四郎國氏は三河の今川荘の地頭職を与えられて、今川を名乗った。これが今川家の始まりになった。(始祖今川國氏)

三代目当主である今川範國は足利尊氏の家臣として各地で戦功をあげて、足利幕府設立に大きな貢献をした。この功が評価されて駿河に領地を与えられた。

範國の長子範氏がこれを承継して、今川家主流「駿河今川氏」として代々受け継ぐスタートとなった。今川家の11代当主となったのが今川義元。

天文23年(1554年)、今川義元は嫡子氏眞の妻として北条氏康の娘(早川殿)を迎え、武田・北条との姻戚関係を深め、甲相駿の連携を強化。その後、三河を巡る織田氏との対立が激化し、その結果今川の祖先でもあった吉良氏が叛旗を翻した。

永禄3年(1560年)尾張への進攻を始めたが、桶狭間で織田信長に攻められて落命(42歳)。

既に今川家の家督を継いでいた今川氏眞は、配下の實力者の脱落が続く弱体化、永禄12年(1569年)に武田信玄・徳川家康によって駿河・遠江を追われ、今川家は滅亡した。

今川氏眞は一旦妻(早川殿)の実家(北条家)に身を寄せたが、のちに徳川家康の家臣となった。家康は予てより氏眞の存在を認めており、高家の旗本として重用した。高家(*)の扱いは、嫡子範以・嫡孫直房に受け継がれ、幕末まで徳川幕府の大事な役割を担った。

*註: 高家とは 朝廷関係の儀式・典礼を司る役職。老中の支配下に属し、朝廷への使者・勅使や公家の接待・伊勢神宮や東照宮への代参などを任務とした。

少々遡ることになるが、今川家3代当主範國には範氏・貞世・氏兼・仲秋の四人の子がいた。前述のように範氏が今川本流の継承者となったが、次男貞世は鎌倉で育ち、13歳頃から駿河守護となった父と行動を共にしている。遠江今川家を名乗り、足利尊氏と弟の直義との内部抗争においては尊氏側に付き、以降も足利本流を支える働きをした。貞治6年、足利義詮が他界するとともに出家して了俊を名乗り、今川本流の承継にあたっての難題解決にも力を発揮した。足利義満の時代には九州探題を任じられたが、失脚して一線から退いた。和歌を始めとして、文学の分野でも活躍した。

今川範國の三男である氏兼は元徳元年(1329年)に生まれた。建武3年(1336年)に吉良満義から三河の須美の政所職を受け、建武5年(1338年)には父範國の所領の一部と吉良貞義の所領である三河幡豆の一部を受けているが、年齢を計算してみるとまだ子供だったことがわかる。足利義詮・義満に仕えて、良い処遇を受けていたことは確かである。氏兼の系列は、駿河の蒲原城を所領として得て「蒲原氏」を名乗ったという記録が残っているが、名乗った時期については諸説あり定かではないらしい。

今川範國の四男の仲秋は、次兄貞世(了俊)の養子となり、遠江今川の二代当主を勤めた。また貞世が九州探題になった時には行動を共にして、戦果を挙げたが、応永6年(1399年)、大内義弘が起こした内乱(応永の乱)に関与した容疑で役職・所領を外され、命と引き換えに駿河を手放した。

仲秋の末子である國秋は、肥前佐嘉を幕府より与えられて、持永氏(肥前今川家・佐賀今川家)の祖となった。

●観泉寺の歴史

慶長2年(1597年)、中野の成願寺の住職鉄叟雄鷲(てっそうゆうさく)が末寺として上井草村に創建し、当初は観音寺という寺名だった。

中野の本町にある曹洞宗多宝山成願寺は、中野長者と言われた鈴木九郎の開基。紀州生まれの鈴木九郎は室町時代初期に中野郷にやってきて、中野から角筈にかけての土地を購入して開拓を続けて財を成し「中野長者」と呼ばれていた。一人娘の小笹が18歳で病死したことから仏門に入り、小田原の大雄山最乗寺で修業を積み、正蓮という名を得て僧侶になった。永享10年(1438年)自宅を寺にして、娘の戒名から字をいただき寺名を正観寺としたが、のちの世で、寛永5年(1628年)に成願寺と改名されたという記録がある。杉並の観泉寺との関係については調べたがわからなかった。

元和5年(1619年)、大友家17代当主である大友義親が没した。大友義親には子がなく大友家は断絶することになり、大友義親の妻(今川範以の三女・今川直房の姉)は実家に戻ったのちに剃髪して観音寺に入った。

